HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「服務」という言葉の出現とその背景 ： 日本資料を中心に
Author(s)	胡, 琪
Citation	国語国文研究, 142, 76(1)-64(13)
Issue Date	2013-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93188
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_142_76-64.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「服務」という言葉の出現とその背景
—— 日本資料を中心に ——

胡　　琪

はじめに

「服務」という言葉は中国語では、「為人民服務」、「服務員」、「服務業」、「服務態度」など様々な形で使用されるが、日本語では、日常生活で使用されることがほとんどない。中国語の「服務」の起源について、高名凱・劉正埮『現代漢語外来詞研究』(1958. 文字改革出版社)は、日本語固有語[1]からの借用語とする。その後の高名凱・劉正埮『漢語外来詞詞典』(1984. 上海辞書出版社)でも、「服務」を日本語起源と明記している[2]。このことから、「服務」は日本語から中国語へ流入した言葉ということが認められる。しかし、日中両言語における「服務」の使用状況は対照的で、日本語ではあまり使用されていないのに対し、中国語ではHSKの甲級語彙[3]に収録され、頻繁に使用されている。日本で造られたとされる「服務」が日中両言語で異なる展開を遂げたのは何故であろうか。この問題を解明するためには、まず日本語における「服務」という言葉の出現と発展について考察を行っておくことが必要である。以下にこの点を論じる。

1　先行研究とその問題点

『現代漢語外来詞研究』にリストアップされている外来詞の数は1,126語である。そのうち、日本語借用語は459語で、全体の三分の一を占めており、これらを次の3種類に分類している。

（イ）　日本語固有語からきたもの
　　場所、服務、体験、退却、手続、取締、打消…　91語

---

[1] 日本語固有語とは欧米の語彙を訳すために造った訳語のことではなく、日本語で元々使用されている語彙のことである。原文に「純粋日語（即日語原有的而非用漢字翻譯歐美詞彙成員的日語的詞）來源的現代漢語外來詞」としている。

[2] 『漢語外来詞詞典』1984. 上海辞書出版社：p 108.

[3] HSKとは世界で約20の国々や地域で実施されている中国語能力認定試験のことである。HSKの甲級語彙は初級中国語を把握するための最も基礎的な語彙である。

（ロ）　古典中国語からきたもの（日本人により新たな意味が付与されている）
　　文学、分析、演説、博士、封建、法律、経済…　67語
（ハ）　近代訳語からきたもの
　　美化、調整、抽象、動員、議会、軍事、法人…　301語

この分類は訳語であるかどうかで、日本語借用語を二分し、さらに訳語を翻訳方法で二分したものとなっている。「服務」は（イ）の日本語固有語からの借用語に挙げられている。『現代漢語外来詞研究』は世界各国語から中国語に流入した借用語を網羅的に整理して、分析したものであるが、挙げられた言葉について用例を示し、具体的な分析をすることは行われていなかった。

そして、『現代漢語外来詞研究』をもとにして、その中に収録されている外来語を補充して編集された中国最初の外来語辞典『漢語外来詞詞典』[4]でも、「服務」を日本語起源と記している。『漢語外来詞詞典』に収録されている日本語借用語は、通常、見出し、中国語の発音・意味・語源・日本語の表示・日本語の発音の順番で示されている。日本語借用語が訳語である場合、訳される元の言葉の情報も示されている。例えば、

经济　jīngjì　①在历史上一定时期的社会关系的总和。②国名经济的泛称。源日　経済　keizai　〖古代汉语《宋史 王安石传》：'朱熹尝论安石，以文章节行高一世，而尤以道德经济为己任。'意译英语　economy, economics〗[5]

のように、「経済」が古代漢語に例があることを示し、訳された元の言葉が英語 'economy'、'economics' であることを示すことによって、詳しい説明を施している。それに対して、「服務」の解釈は次のようになる。

服务　fúwù　①为国家机关，企事业等履行职务。②以各种形式为他人提供某种特殊使用价值的非生产性活动。源日　服務　fukumu

このように、「服務」は日本語が起源であることが明記されているが、その後ろに、「意译英语」の情報は示されておらず、「服務」を訳語として見なしていないようである。

また、日本側についても、近代の漢語を研究対象にしている森岡健二『近代語の成立（語彙編）』（1969．明治書院）、明治期の語彙を収録している惣郷正明・飛田良文『明治のことば辞典』（1986．東京堂）、明治、大正、昭和の新語を収録している米川明彦『明治・大正・昭和の新語流行語辞典』（2002．三省堂）のいずれにも、「服務」は収録されていない。また、李漢燮『近代漢語研究文献目録』（2010．東京堂）でも、「服務」

---

[4] 『漢語外来詞詞典』は各国語から中国語に入ってきた外来語を一万語以上収録している。

[5] 『漢語外来詞詞典』1884．上海辞書出版社：p 163.

に関する研究文献は見当たらない。「服務」を『日本国語大辞典』（第二版）で調べたところ、次のような記述が見られた。

服務【ふくむ】（名）事務、業務に従事すること。
※海軍准士官下士任用進級条例（1896）九条
「海上勤務とは艦船に乗組み服務するを謂ふ」
※地方自治法（1947）一三八条・九
「分限及び懲戒、服務、研修及び勤務成績の評定」

「服務」の記述は、見出し、発音、品詞、語釈と用例文からなっているが、「服務」の語誌に関する内容は示されていない。用例の年代から見ると、二例とも近代のもので、日本語固有語という証拠は見当たらない。一方、前記のように、『現代漢語外来詞研究』では、「服務」を（イ）の日本語固有語からの借用語として挙げている。『日本国語大辞典』の記述は、『現代漢語外来詞研究』の記述と矛盾している。

また、宮田和子（1998）は『現代漢語外来詞研究』について、先駆的な業績と評価されるが、個々の語には異論が多い上に、起源の判定に英華・華英字典を利用した痕跡がないとしている。この点を確認するため、19 世紀に編纂・刊行された英華・華英辞書類を調べた。Morrison『華英字典』(1815-1823)の見出しには、'Serve'、'Service'、'Duty' がいずれも収録されていない。その後の Williams『英華韻府歴階』(1844) と、Lobscheid『英華字典』(1866-1869) には収録が見られる。'Serve'、'Service'、'Duty' の訳語が「本文」・「職分」・「事」・「服事」などあるが、「服務」という言い方は記載されていないのである。詳しいことを次の表 1 に示す。

表 1　英華・華英辞典における 'Serve'、'Service'、'Duty' の訳語

西暦	書名/編著者	見出し	語釈
1844	An English and Chinese Vocabulary in Court Dialect【英華韻府歴階】/Williams	duty	餉銀，税，本分，己任
		serve	事，服事，服侍，捧
		service	（収録なし）
1866-1869	English and Chinese Dictionary【英華字典】/Lobscheid	duty	本分，職分，守本，安分，孝順者，服法者，分内之事，己任，責任，税，家事，家務…
		serve	事，服事，役，奉事，傜，仕，當，為事仔，為使傜人，當奴，事君…
		service	作工，事，仕，為官，事君，代労，事上帝…

以上の先行研究からみると、「服務」は日本語から中国語に流入した言葉であるが、その語誌についてはまだ充分に解明されていない。本稿では 19 世紀から 20 世紀初頭の資料を中心にして、「服務」の成立及びその変遷について考察を行う。

2　日本語における「服務」の成立

2.1　日本の対訳辞書における「服務」

日本の対訳辞書における「服務」の収録を調査する。まず、日本に最も早く伝わったオランダ語の辞書で、「服務」に対応するオランダ語 'dienen'、'dienst' を調べた。調査結果を表 2 にまとめておく。

表 2　和蘭・蘭和辞書における 'dienen'、'dienst' の訳語

西暦	書名/編著者	見出し	語釈
1796	波留麻和解/稲村三伯、宇田川玄随、岡田甫説ら	dienen	事ル、勤メル、恩恵ヲ顕ス、加勢スル、援ケル、軍ノ勤メ、仕ヱル。
		dienst	勤メ、軍ノ勤メ、神ノ勤メ、恵ミ、恵ム。
1810	蘭語譯撰/奥平昌高	dienen	勤任。
1855	和蘭字彙/桂川甫周	dienen	仕ヘル、用ヲ達シテ遣ル、扶テ遣ル、加勢シテ遣ル、兵士ニナル。
		dienst	勤メ、用達チ、兵士ノ勤メ。

表 2 から明らかなように、1790 年代・1810 年代・1850 年代の和蘭・蘭和辞書に 'dienen'、'dienst' を一般的に「勤メ」・「仕ヘル」というふうに訳す。そして、軍事の場合に、「軍ノ勤メ」と、宗教の場合に、「神ノ勤メ」と訳す。「服務」で訳すことはなかったことが確認できる。

蘭和辞書の次に、英和・和英辞書における「服務」の収録も調べた。江戸末期から、明治初期までの英語の対訳辞書における 'Service'、'Serve'、'Duty' の訳語の調査結果を、年代順に並べ、表 3 にまとめる。

表 3　英和・和英辞書における 'Service'、'Serve'、'Duty' の訳語

西暦	辞書名	Service/Serve/Duty の訳語
1830	英和・和英語彙/メドハースト	Service：Tsoo-to-me、ツトメ。 Duty：収録なし Duties：Oon z'ya-oo、ウン、ジヤウ、運税。
1856	英和対訳袖珍辞書/堀達之助	Service：勤ヲ用立チ、勤ムベキコト、樹名。 Serve-ed-ing：仕ヘル、用立チ、助ケル、取扱フ、勤メル、満足サセル、充分ニアル。 Duty：勤ム、運上年貢。
1867	和英語林集成初版/ヘボン	Service：Tsutome, hōkō, yaku, yakume, yō. Serve：Tsutomeru, hōkō suru, tsukayeru. Duty：Tsutome, yakume, hōkō, shokushō, nin, hadz, atarimaye, szbeki-koto, unjyō, zei, zeigin.
1871	浅解英和辞林/内田晋斎	Service：ツトメ、ホウコウ、ヤク、ヤクメ、ヨウダチ。 Serve：ツトメル、ホウコウスル、キウジヲスル、ツカヘル、シタガフ、モテナス、ヨウニタツ、オガム、ウヤマウ。 Duty：ツトメ、ヤクメ、ホウクソウ、シヨクシヤウ、ニン、ハヅ、アタリマヘ、スベキコト、ウンジヤウ、ゼイ、ゼイギン。

1872	英和対訳辞書 /荒井郁之助	Service：勤メ、用立チ、勤ムベキコト、樹名。 Serve：仕エル、用立ツ、助ケル、取扱ウ。 Duty：勤ム、運上年貢。
1872	和英語林集成 再版/ヘボン	Service：Tsutome, hōkō, yaku, yakume, yō, nenki. Serve：Tsutomeru, hōkō suru, tsukayeru. Duty, n. Tsutome, yakume, hōkō, shokubun, subeki koto, unjō, On duty, tō-ban.
1873	附音挿図和訳英字彙　初版/柴田昌吉　子安峻	Service：工作、職務、勤仕、事務、行為、辞職、服従、拝礼、食器。 Serve：事ル、勤ル、事スル、助ル、従ウ、満足サスル、管理フ、執行フ、足ル、拝ム。 Duty：職分、義理、従順、謙遜、恭敬、職掌、軍役、税、税銀。
1879	英華和訳字典 /津田仙［ほか］	Service：作工、事、ツトメ、シゴト、ハタラキ。 Serve：事、服事、役、奉事、ホウショクスル、ツカヘル。 Duty：本分、職分、タウゼンノコト。
1884	明治英和字典 /尺振八訳	Service（名）：服事、僕役、職務、職任、勤労、教義、拝、礼拝、楽譜ノ名（祈祷用ノ）、軍務、兵役、利益、敬意、献立（食事ノ）、縄索用ノ品物［航］。 Serve-ed-ing(他)：事スル、服事スル、服役スル、仕フル、助クル、代ル、代理スル、給仕スル（食事ノ）。 Serve(自)：臣僕トナル、服役スル、職ヲ盡ス、用ニ足ル、相應スル。 Serve（名）：服事者、服役者、奴僕、仕丁。 Duty(名)：水分、義務、責任、職務、職掌、軍務、恭敬、敬意、税関、税。

英和・和英辞書では、'Service'、'Serve'、'Duty' に対応する訳語として、「ツトメル」、「ツカヘル」が一般的であるが、「服務」で訳すことはなかった。ただし、訳語の中に、「服従」・「服事」・「服役」などのような「服」の使用されている訳語と、「事務」・「職務」・「軍務」のような「務」の使用されている訳語が見られる。これらの訳語は「服務」の成立と関係する可能性が考えられる。

2.2　軍事関連書における「服務」

『日本国語大辞典』における「服務」の最初の用例が海軍の条例に出たことから見ると、「服務」の成立は軍隊との関連が考えられる。そこで、江戸末期から明治期にかけての軍事関連の論文・著作・辞書などを調べた。

軍事関連の論文・著作の調査では、明治前期の学術雑誌に載っていた軍事関連の論文・記事を使用した[6]。そして、明治の軍制と緊密な関係を持っている西周の著作・翻訳作品と、福沢諭吉らと一緒に創刊した『明六雑誌』も調査対象にした。軍事関連の辞書の調査では、『五国対照兵語字書』(1881．参謀本部)、『改正兵語辞書』(1890．参謀本部)、『独和兵語辞書』(1899．独逸語学雑誌社)、『和英英和兵語辞典』(1905．英学新報社)、『英和和英兵語辞典』(1907．英学新報社)、『英和陸海軍兵語辞典』(1910．

[6] 調査対象にしたのは渡辺正雄『明治前期学術雑誌論文記事総覧』(1990．ゆまに書房)の政治・経済の細目の、軍事項目グループに挙げられている軍事関連の論文・記事である。

明誠館）といった明治期の軍事用語辞書を中心に調査した。調査の結果、現時点では「服務」に関する最初の記載は、1881 年に、参謀本部によって出版された日本最初の軍隊用語対訳辞書『五国対照兵語字書』である。

『五国対照兵語字書』は 1867 年オランダの将校蘭達拉多[7] が編集した仏・独・英・蘭四ヶ国語対照の『海陸軍術語薈譯辭書』を翻訳底本にして、西周ら[8] が和訳を付けて編集したものである。本辞書は仏語のアルファベット順で見出し語を示しており、後ろに「—」で区切りながら、独語・英語・蘭語の順で訳語が記され、最後に日本語の訳語が縦書きで附されている[9]。編集者の室岡峻徳によると、言葉を翻訳するとき、各種の辞書及び兵書を参考したうえ、慎重に翻訳したという[10]。参考とした辞書は『五国対照兵語字書』には挙げられていないが、当時次々に出版された対訳辞書を見たものであろう。本辞書の 874〜875 ページに、「服務」という言葉が 10 箇所に記載されている。その一部を次に示す。欧文は原文の表記の通りに示した。

Service, m. — Militärdienst, m. — Service. Militaire dienst, Krijgsdienst, f.	— 軍役
Service dans les places ou des gardes, m. — Garnisondienst, Wachtdienst. — Garrison-duty. — Wachtdienst, Garnizoensdienst.	— 守衛服務
Service de semaine, m. — Aufsichtsdienst. — Orderly duty. — Weekdienst.	— 週番服務
Service des avant-postes, m. — Sicherheitsdienst. — Duty of the out-posts. — Veiligheidsdienst, Voorpostendienst.	— 前哨服務
(中略)	
Servir une batterie, v. (art.) — Eine Batterie bedienen. — To serve a battery. — Eene batterij bedienen.	砲隊ニ服務スル

上に示した内容をみると、仏語・独語・英語・蘭語の順で記されている原語に、互いに意味の対応していないところが見られる。例えば 'Service de semaine' の項目に、

---

[7] 本名 Heinrich Mathias Friedrich Landolt で、1828 年生まれのオランダの軍人である。

[8] 辞書の序によると、編集者は西周・室岡峻徳・菊野七郎・矢島玄四郎・若藤宗則である。

[9] 本稿では便宜上、日本語の訳語を横書きにする。

[10]「而今譯者。加参以各種辞書。及各科兵書。比審讐覆。討究幾盡。欲其精確也。」『五国対照兵語字書』1881：p 2.

仏語と蘭語の意味は「週番服務」であるが、独語の意味は「監視の勤務」であり、英語の意味は「伝令服務」である。但し、日本語の訳語「週番服務」をみると、翻訳は仏語と蘭語を中心に行われたようである。この現象は辞書の翻訳の方針に関わっていると思われる。辞書の凡例に、「今所纂譯本編及續編共以佛語為主故下譯字亦專據佛國之定例較獨英蘭之慣用則或不允當覽者諒焉」と述べている。つまり、『五国対照兵語字書』は仏語から日本語に訳したものだと考えられる。「服務」も仏語 'Service' の訳語として見ることができる。

なお、「～＋服務」の複合語は上記の 3 語のほかに、「大砲服務」、「軍廠服務」、「野戦服務」、「隊内服務」、「衛生服務」、「馬盥服務」など 6 語ある。このように、『五国対照兵語字書』には、「服務」が含まれる複合語が数多く収録されている。そして、「服務スル」の形で、句の中に現れた語例が 1 件ある。単語 'Service' を「軍役」という古くから使われている言葉で訳したが、'Service dans les places ou des gardes' のような、'Service' の内容を詳しく説いた連語を、今まであまり使われていない「服務」を使い、複合語の形で訳している。

前節に述べたように、当時、'Service' という概念に対応する訳語は「ツトメ」・「ツカヘル」といったものである。『五国対照兵語字書』の出版された 1880 年代前後の対訳辞書をみると、'Service' をよく「ツトメ」・「ツカヘル」のように訳している。一般的な訳語を取らずに、「服務」と訳すのは『五国対照兵語字書』が最初であろうと思われる。

なお、『五国対照兵語字書』における「服務」をみると、語例 10 件のうち、9 件は複合語の構成要素として、残りの 1 件は句の成分として収録されている。「服務」は見出し語の訳語より、フレーズの訳語のほうによく使用されている。このことからみると、当時「服務」という言葉は独立性がまだ弱く、一時的な訳語として使用されている可能性もある。

3　日本語における「服務」の変遷

3.1　軍事関連書における「服務」の使用

「服務」という言葉は 'Service' の訳語として、はじめて『五国対照兵語字書』に収録されて以来、当時の軍事関連書にもよく使われるようになった。明治期の軍事分野の出版物の中で、書名あるいは目録に「服務」という言葉を使ったものをまとめると、次の表 4 になる[11]。

[11] 筆者は国立国会図書館の近代デジタルライブラリに収録されている軍事関連書（NDC 分類 39 国防・軍事）を対象として、「服務」の使用状況を調査した。

表 4　明治期出版の軍事関連書の中、書名あるいは目録に「服務」という言葉を使用したもの[12]

書名	刊行年	使用例
陸軍兵員必携	1882	衛戍服務
独逸参謀服務要領	1885	独逸参謀服務要領
参謀服務実施	1888	参謀服務実施
陸軍軍人服務必携	1890	陸軍軍人服務必携
官民必携兵事要書	1890	大隊区司令部服務規則
陸軍軍人服務必携	1892	陸軍軍人服務必携
軍隊学　兵卒教範	1895	衛戍服務規則
軍隊学　附・村田連発銃分解法	1896	衛戍服務規則
衛兵勤務	1896	衛戍服務一般ノ心得/伝令兵及号砲手服務ノ心得
軍事学教科書	1896	衛戍服務規則
歩兵須知	1897	予備後備兵及帰休兵服務中ノ心得
軍隊学　兵卒教範	1898	衛戍服務規則
和魂之友　古今兵学	1900	衛戍服務規則
陸軍経理学	1901	宣誓及服務紀律
最近軍隊入門	1902	衛戍及風紀衛兵服務の概要
和魂之友　東洋泰斗	1903	衛戍服務規則
参謀要略	1903	参謀服務要旨
歩兵須知	1903	衛戍及風紀衛兵服務ノ概要
台湾陸軍処務提要	1903	服務
軍人教科書	1905	衛戍服務規則摘要
改正最新式歩兵教範	1905	衛戍服務規則摘要
軍隊服務要覧	1907	衛戍服務ノ規定/風紀衛兵服務/守衛隊服務
歩兵教範	1907	衛戍服務規則摘要
衛兵勤務問答	1908	衛戍服務
下士上等兵学科問答	1908	衛戍服務規則ノ摘要
下士兵卒学科教育応用問答	1908	衛戍服務規則
歩兵教科書	1908	衛戍服務規則ノ摘要
四十一年式歩兵教科書	1908	衛戍及風紀衛兵服務ノ概要
歩兵須知	1908	衛戍及風紀衛兵服務ノ概要
騎兵須知	1908	衛戍服務及風紀衛兵勤務
野砲兵山砲兵須知	1908	衛戍服務及風紀衛兵勤務
兵営生活	1908	衛戍及風紀衛兵服務の概要
陸軍刑法・懲罰令・衛戍服務規則問答	1909	衛戍服務規則問答/衛戍服務/衛兵ノ服務
下士上等兵服務提要	1909	軍隊服務/衛戍服務及衛兵
下士兵卒精神訓戒集	1909	衛兵服務中ノ心得
国民必携通俗軍隊学便覧	1910	兵役服務者の心得
在郷軍人心得	1912	現役服務願/独立守備隊服務願
在郷軍人要覧	1912	独立守備隊服務願
憲兵須知　第１、２巻	1912	憲兵ノ服務及賞罰ニ関スル法規並ニ陸海軍ニ関スル法則ノ大要及雑則/憲兵ノ服務及賞罰ニ関スル法規

[12] 目次の中で「服務」が２回以上使用される場合、「/」で区切りをつけて表示する。

表4を見ると、「服務」は『五国対照兵語字書』に現れた翌年から『陸軍兵員必携』に複合語「衛戍服務」の形で使用されている。その後、ほかの軍事関連書、特に、軍隊の教科書・入門書・必携などの基礎的な軍事関連書にも、「服務」の使用がよく見られる。そこで、「服務」は『五国対照兵語字書』に限られる言葉ではなく、軍事関連書にもよく見られる言葉であるといえよう。なお、その使用例から、単語より、複合語の形でよく使用されていることがわかる。

「服務」が『五国対照兵語辞書』に収録された翌年から、一気に広がるように見えるが、その原因は様々考えられる。一つの原因としては、軍事関連書の性質が挙げられる。軍事関連書は民間の事業ではなく、最初に官製版として参謀本部で編纂・刊行されている。しかも、軍事関連書に用いる用語も恣意性を避け、統一性を重視している。そのため、明治初期に参謀本部によって翻訳・出版された日本最初の軍事用語対訳辞書『五国対照兵語字書』は兵語辞書の分野で、権威の有る存在である。収録語彙もその後の軍事関連書に取られやすいと考えられる。

3.2 軍事用語から一般化された「服務」

「服務」が『五国対照兵語字書』に収録され、軍事関連の資料で多用された結果、軍事以外の分野でも使用されるようになる。当時の月刊誌『太陽』(1895-1928) をテキスト化した「太陽コーパス」で、「服務」を検索したところ、用例が21件見つかった。1895年7号の『太陽』では、「服務」の使用が下記のようになる。

(1) 業成りて大學の教授を擔任し又醫學に從事して大に爲す所ありしも、如何せん服務僅に三年、天君の爲に壽をかさず...[13]

用例(1)は「故梅錦之丞君の事蹟」という文章に出たものである。この文章は軍事分野との関連がなく、明治期の眼科医梅錦之丞の一生の事蹟を追憶したものである。文章の中の「服務」という言葉は、「職務に服する」という意味で単独で使用されている。

そのほか、当時の女性・子供向け雑誌などを対象とした「近代女性雑誌コーパス」でも「服務」を検索したところ、用例が2件見つかった。どちらも軍隊との関連がなく、「職務に服する」の意味で使用されている。

(2) 卒業の後正當の事由なくして服務の義務を盡さゞる者亦前項に同じ[14]

(3) 其代り卒業生服務規則なる、餘計な文部省令が發布になつてゐて、卒業證書受領の日より基算して、全支給は五ケ年、一部は三ケ年、自給は二ケ年間は、育英の業に從事する義務がある。[15]

---

[13]「故梅錦之丞君の事蹟」作者不詳、『太陽』 1巻7号 1895：p 142.

[14]「学校」作者不詳、『女性雑誌』 41号 1894：p 17.

[15]「御茶の水評判記」作者不詳、『女学世界』 3号 1909：p 44.

参考として、『朝日新聞』の1881年から1926年まで、記事タイトルに「服務」の使用している用例を検索したところ、64件が見つかった。その内訳を年代別に示すと、1880年代28例、1890年代6例、1900年代12例、1910年代14例、1920年代4例となった。1880年代、すなわち「服務」が『五国対照兵語字書』に収録された頃の使用回数が最も多い。この時期における「服務」の具体的な使用例をまとめてみると、表5のようになった。

表5　1880年代『朝日新聞』の記事タイトルにおける「服務」の使用例

西暦	「服務」の使用例
1882	服務規律の趣旨徹底を促す（8/5）　行政官吏服務紀律の説明（8/8）　行政官吏服務紀律の説明（8/11）　行政官吏服務紀律の説明（8/18）
1884	徴兵令の予備・後備服務期間の欧州との比較（1/26）
1885	陸軍各部戦時服務規則要領（3/17）　陸軍各部戦時服務規則要領（3/22）　陸軍各部戦時服務規則要領（3/24）　陸軍各部戦時服務規則要領（3/26）　陸軍各部戦時服務規則要領（3/27）　町村役場用掛服務心得（5/12）　司法官吏服務規律（10/17）
1886	兵役服務期限減縮議案（6/27）
1887	改正官吏服務紀律（7/31）　官吏服務紀律（8/3）　官吏服務紀律（8/4）　官吏服務紀律（8/5）　官吏服務紀律（8/6）　官吏服務紀律（8/7）　服務紀津の貼示（8/31）　海軍省訓令第百三拾四号　海軍軍医官服務通則改正（12/28）
1888	官吏服務規律（8/5）　知事の服務紀律（11/6）　陸軍軍医服務通則（11/17）　皇宮警察官服務規程（12/16）　服務通則（12/26）
1889	司獄官服務規則（11/14）
1890	看守服務練習の訓令（11/7）

表5を見ると、「服務」が単独に使用された用例が見られず、いずれも「服務紀律」や、「服務規則」などの複合語の形で使用されている。その中で、最も多く使用されているのは「服務紀律」という言葉である。頻度が高いのは、1880年代に、「官吏服務紀律」に関する記事が多く掲載されているからである。「官吏服務紀律」は明治期の官吏の服務上の義務を規定していた法律であり、1887年発布されて以来、官吏の守るべきおきてとして、新聞に盛んに報道され、世間に知られた。1910年に、森鴎外の書いた小説『あそび』の中にも、「官吏服務規律」と類似する「官吏服務規則」の使用が見られる。

(4)　木村はこう云う事を聞く度に、くすぐられるような心持がする。それでも例の晴々とした顔をして黙っている。
「こないだ太陽を見たら、君の役所での秩序的生活と芸術的生活とは矛盾していて、到底調和が出来ないと云ってあったっけ。あれを見たかね。」
「見た。風俗を壊乱する芸術と官吏服務規則とは調和の出来ようがないと云うのだろう。」[16]

[16]『森鴎外全集　第一巻』1965．筑摩書房

このようにみてくると、「服務」が『五国対照兵語字書』に現れてから、軍隊の世界で広く使用されているうちに、軍隊以外の役所（官公庁）の世界でも使用されるようになり、さらに、雑誌、新聞、小説での使用を経て、世間に知られ、日本語に定着したという展開が考えられる。ただし、これをきちんと証明するには軍隊以外の役所で「服務」に相当する別の言葉があったか否かを検討しておくことが必要であるし、『五国』の編集事情の解明により、「五国」の由来の手がかりが得られるかもしれないので、今は見通しとして述べるにとどまる。

3.3　明治以降の国語辞書における「服務」

「服務」という言葉がはじめて国語辞書に見られるのは、1898 年出版の国語辞書『ことばの泉』（落合直文）である。『ことばの泉』に、「服務」について、次のように解釈している。

ふくむ　名　服務。職務に服役すること。

意味記述をみると、「軍務」ではなく、「職務」という言葉を使っているが、「服役する」という言葉をみると、軍隊との関わりが少し残っているように見える。本辞書の編集者落合直文は 1884 年大学を中退し、軍隊で 3 年間勤めたことがある。辞書における「服務」の収録は編集者の経歴と関係するかもしれない。

「服務」は『ことばの泉』での収録をはじめ、金沢庄三郎『辞林』（1907．三省堂）、上田万年『大日本国語辞典』（1915．冨山房）、新村出『辞苑』（1935．博文館）、新村出『言林』（1949．全國書房）、金田一京助『辞海』（1952．三省堂）などの国語辞書にも収録され、次第に定着するようになる。各国語辞書における「服務」の解釈を見ると、元の「軍務に服すること」という意味は徐々に「職務に服すること」という意味に取り替えられたことがわかる。ただし、各国語辞書の解釈や用例などを見ると、「服務」はやはり軍事や法律の公文書に使用されている専門用語であると感じられる。

おわりに

本研究は「服務」という言葉の日本語における成立と発展を検討してきた。「服務」は日本語で元々使われている言葉ではなく、明治期になってから現れた言葉である。日本最初の軍事用語対訳辞書『五国対照兵語字書』における「服務」の収録は現時点では「服務」に関する最初の記載である。その後、「服務」は軍事関連書に頻繁に使われるようになっており、「服務規則」・「服務規律」などの複合語が相次いで出てきた。軍事用語として多用されているとはいえ、「服務」は次第に一般化され、「軍務に服する」の意味だけではなく、「職務に服する」の意味としても使われるようになったのではないかと考えた。1898 年に国語辞典『ことばの泉』に収録されるようになった。

今後、日中語彙交流の立場で、「服務」は如何に中国語に流入し、中国語に広がってゆき、常用漢語の一つとなるかという一連の問題を中心に、考察していきたい。

参考文献（著者名五十音順）

李漢燮（2010）『近代漢語研究文献目録』．東京堂
高名凱・劉正埮（1958）『現代漢語外来詞研究』．文字改革出版社
高名凱・劉正埮等（1984）『漢語外来詞詞典』．上海辞書出版社
佐藤亨（1986）『幕末・明治初期語彙の研究』．桜楓社
佐藤亨（1992）『近代語の成立』．桜楓社
佐藤亨（2007）『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』．桜楓社
邵栄芬（1958）「評『現代漢語外来詞研究』」『中国語文』 7 月号．北京大学出版社
沈国威（1994）『近代日中語彙交流史―新漢語の生成と変容』．笠間書院
沈国威（1996）『『新爾雅』とその語彙』．白帝社
惣郷正明・飛田良文（1986）『明治のことば辞典』．東京堂
信岡資生（2003a）「明治期の兵語辞書について（一）」．『成城大學經濟研究』162 号
信岡資生（2003b）「明治期の兵語辞書について（二）」．『成城大學經濟研究』163 号
信岡資生（2004）「明治期の兵語辞書について（三）」．『成城大學經濟研究』165 号
信岡資生（2005）「明治期の兵語辞書について（四）」．『成城大學經濟研究』169 号
信岡資生（2008）「明治期の兵語辞書について（五）」．『成城大學經濟研究』181 号
朴均轍（2010）「日本における軍隊用語の成立に関する研究―『五国対照兵語字書』及び独和軍隊用語辞典を中心に」．『日本語文学』44 輯
馬西尼（1997）『現代漢語詞彙的形成―十九世紀漢語外来詞研究』．漢語大詞典出版社
宮田和子（1998）「『現代漢語外来詞研究』再考(1)―十九世紀の英華・華英辞典を中心に」．『英学史研究』第 31 期
米川明彦（2002）『明治・大正・昭和の新語流行辞典』．三省堂
森岡健二（1969）『近代語の成立』．明治書院

資　料（年代順）

日本側の辞書・訳語集

『浅解英和辞林』1871．蔵田氏
『英和対訳辞書』1872．書肆小林新兵衛
『五国対照兵語字書』1881．参謀本部
『改正兵語辞書・独和対訳之部第一』1889．参謀本部
『改正兵語辞書・独和対訳之部第二』1890．参謀本部
『独和兵語辞書』1899．独逸語学雑誌社
『和英英和兵語辞典』1905．英学新報社
『英和和英兵語辞典』1907．英学新報社
『英和陸海軍兵語辞典』1910．明誠館
『大日本国語辞典』1915．冨山房
『辞林（1907）』1923．三省堂

『辞苑』1935．博文館
『言林』1949．全國書房
『辞海』1952．三省堂
『蘭語譯撰 1810』1968．臨川書店
『日本国語大辞典』1972-1976．小学館
『英和対訳袖珍辞書（1856）』1973．秀山社
『和蘭字彙（1855）』1974．早稲田大学出版会
『大漢和辞典』1984-1986．大修館書店
『附音挿図和訳英字彙・初版（1873）』1995．ゆまに書房
『明治英和字典（1884）』1995．ゆまに書房
『和訳字彙（1888）』1995．ゆまに書房
『波留麻和解（1796）』1997．ゆまに書房
『英華和訳字典（1879）』1998．大空社
『広辞苑』1998．岩波書店
『英和・和英語彙（1830）』2000．三省堂
『和英語林集成・初版・再版・三版対照総索引』2000．港の人
『ことばの泉（1898）』2003．大空社
『ジーニアス和英辞典』2003．大修館書店
『新和英大辞典』（第五版）2008．研究社
『日本語語感の辞典』2010．岩波書店

中国側の辞書・訳語集

『漢訳新法律詞典』1904．商務印書館
『学生字典』1915．商務印書館
『中華大字典』1915．中華書局
『国文成語辞典』1916．中國圖書公司
『国音普通字典』1921．中華書局
『辞海』1936．中華書局
『辞海』1979．上海辞書出版社
『辞源』1979．商務印書館
『漢語外来詞詞典』1984．上海辞書出版社
『漢語大詞典』1986-1993．漢語大辞典出版社
An English and Chinese Vocabulary in Court Dialect（1844）1995．ゆまに書房
『新爾雅（1903）』1995．白帝社
A Dictionary of the Chinese Language（1815-1823）1996．ゆまに書房
English and Chinese Dictionary（1866-1869）1996．千和勢出版部、東京美華書院
『辞海』1999．上海辞書出版社
『現代漢語詞典』2005．商務印書館出版

（こ　き・北海道大学大学院博士後期課程）